

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 20 日現在

機関番号：24506

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2013

課題番号：25670979

研究課題名(和文) 小児のセルフケア看護理論の構築に向けた必要要素の抽出によるモデルの作成

研究課題名(英文) Creating a Model by Extraction of the Key Elements Towards the Construction of Self-care Nursing Theory in Children

研究代表者

片田 範子 (KATADA, Noriko)

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：80152677

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：小児のセルフケア看護理論構築のため大学教員6名と小児看護専門看護師6名に小児のセルフケアをどう捉えるかインタビューを行い、セルフケアについて語られた内容を分析した結果、20のカテゴリーに分類された。更に実践に活用する視点で分析を加えると8つの要素に集約された。必要要素は【子どもの発達に応じたセルフケア】【子どもを出来る主体として捉える】【子どものエージェンシーとしての能力】【子どもにおける依存と不足の意味】【依存的ケアエージェンシーとしての能力】【子育ての文化と甘え】【親子のありよう】【親役割】であった。これらの要素について、どのように分かりやすく説明するかが今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to extract the necessary components for constructing the self care nursing theory for children. Two group interviews had been conducted with educator and practitioner groups. Interview data had been documented and analyzed by the researcher group. The result of iterative content analysis, eight components was extracted. Those were "self care appropriate child development," "capturing child as an enable agent," "ability of child as an agent," "meaning of dependency and amae for the child," "ability of dependent care agent," "culture of child rearing and amae," "child and parent relationship," "role of parent." In order to proceed for development of the theory, description of those components in understandable explanation, and making clear framework of theory.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：オレム看護理論 こどものセルフケア 小児看護学

1. 研究開始当初の背景

小児看護の対象者は身体的・精神的・心理社会的発達段階にある子どもたちである。子どもに即した看護を実践するためには、親・養育者の子どもをケアする能力を高める支援が求められる。

オレムはセルフケアとは「個人が生命、健康、安寧を維持するために自分自身で開始し、遂行する諸活動の実践であり、セルフケアが効果的に実行されるとき、セルフケアは構造上の本来の姿と人としての機能を維持することを助け、人の成長に貢献する」と述べている¹⁾。成人患者の多くが、自分で自分自身のために必要な治療や生活についての判断を行い、医療者とともに療養をデザインすることができる。既に成人領域ではセルフケア看護理論を活用し、患者自らの力を引き出す看護ケアが展開されている。

子どもの場合にも同様であるが、前述したように発達段階において判断力、行動力など生活を統合するレベルが大人のそれとは異なる。小児領域では子どもの認知能力の発達に合わせ親を含めた対応について現理論の発展的活用が求められている。特に疾病を持った子どもに直面した時、大人は子どもの生活能力や主体性を適切に評価し対応することが困難になることが生じやすい。オレムのセルフケア看護理論の基本的構造は子ども自身とその子を支える周りからの支援を内包している。オレムの看護理論では、初版より子どものセルフケアは、新生児期からその子が依存している親や保護者によって充足されていると述べており、これを依存的ケア・エージェントとした。オレムの看護理論は版を上げるごとに、子どもへのセルフケア看護理論の適応について書き加えられてはいるが²⁾³⁾⁴⁾、各発達段階においてセルフケア行動をどのように捉えるか、さらに、依存的ケア・エージェントとの調整については明らかにされていない。

オレムの看護理論の活用は、癌の子どもの痛み緩和の研究は実践でも広く活用され、大学での教育における小児看護学の基本的考え方としてもオレムの看護理論が用いられてきた。セルフケアを基盤とした統合的症状マネジメントを活用した修士論文も発表されている。国内外の文献でも子どもへの活用は見られているが⁵⁻¹⁴⁾、主として学童以上のものである。乳幼児期については論じられておらず、また依存的ケア・エージェント(親)を対象にした研究が多く、いずれも子ども自身の発達段階、疾患、症状に応じたセルフケアの実態ならびにセルフケアに関する看護の構造は説明されてはいない。

これらの経緯を通して、オレムの看護理論を子どもに活用することは検証され

始めているが、子どもに活用した際に必要となる思考の変換など小児看護におけるセルフケア理論の応用版を明示する必要性を実感している。

セルフケア理論を発展させることにより依存的ケア・エージェントの捉え方、ならびに依存的ケア・エージェントとしての能力を明確にすることは小児看護の質の向上に寄与できると考える。小児看護の実践に役立つセルフケア理論構築を目指し、まず本年度は小児看護におけるセルフケア理論構築に必要な要素を抽出し、モデル化することを目的に研究した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小児看護の実践事例からセルフケア理論に追加・修正すべき要素を明らかにし、基礎となるモデル案を示すことである。次の研究では、実践に応用できる「小児のセルフケア理論」の構築を目指す。

3. 研究の方法

- 1) 研究デザイン：質的記述的研究
- 2) 研究協力者：大学の小児看護学教育 6 名と、小児看護専門看護師(以下、CNS と称する)として経験年数 3 年以上の CNS 6 名。大学教員は、大学院博士前期課程において教育経験をもつ大学教員とし、CNS はオレムのセルフケア理論について教育を受けた者、或いはこれまでの活動においてセルフケア理論を用いて実践している者とした。
- 3) 調査期間：平成 25 年倫理審査承認後から平成 26 年 3 月 31 日
- 4) データ収集の方法

< 調査前の準備 >

フォーカスグループインタビューのインタビューガイドを作成した。インタビューガイドは、小児におけるセルフケア看護の現象を引き出し言語化できるような内容とした。子どもの主体性や親の依存的ケア・エージェントとしての能力を考えた看護師の行動と、その行動に対する子どもと親の反応、行動にあたっての課題と残された課題について明らかにできる内容とした。

研究協力における依頼文を作成した。研究対象者は、セルフケアの看護理論を基盤として看護教育している大学教員と、その教育を受けた CNS を選択し、電話にて研究の主旨を説明し、依頼文の郵送について同意を得た。

< 調査方法 >

同意が得られた 6 名の小児看護学教育者を対象に、「小児看護に必要なセルフケア看護」をテーマにフォー

ーカスグループインタビューを行った。

次に CNS6 名を対象とし、オレムのセルフケア看護理論についてグループ討議を行った。時間的都合で4名と2名のグループインタビューとなった。事例を想起してもらいながら、子どもの主体性や親の依存的ケア・エージェントとしての能力を考えた看護師の行動と、その行動に対する子どもと親の反応、行動にあたっての課題と残された課題、良かった結果あるいはうまくいかなかった結果等について語ってもらった。

4) 倫理的配慮

研究機関の研究倫理委員会より承認を得たのち、研究対象者には、研究の目的、主旨を記述した依頼文を郵送し、同意を得て実施した。

インタビューに際し、依頼文にて説明した以下の内容を、再度説明し研究者に同意を確認した。

守秘義務については、契約期間終了後においても有効に存続すること、音声ファイル、テープ起こしした文字原稿等の一切の複製はとらず、関連するすべてのファイル類は、納品後削除する旨を記した旨を示した秘密保持契約書を作成し契約時にかわした。

5) 分析方法

録音したインタビュー内容は、逐語録作成を業者に委託した。

逐語録データから、セルフケアの看護について語られた内容を協力研究者のグループで抽出しコード化した。

成人と子どもにおけるセルフケアの相違点を見出し、小児看護実践に即した要素を抽出した。

子どものセルフケア看護理論を使用するうえで、小児のセルフケアをどう捉えるかについてインタビューを行い、その中からセルフケアについて語られた内容をコード化し、内容分析した。

4. 研究成果

・インタビューデータの内容を検討した結果、大きくは、『子どものセルフケア能力』『親子としてのセルフケア』『日本における子育て文化と甘え』の大きく3つに分けられたが、詳細は20のカテゴリーに分類された。カテゴリーは、オレムのセルフケア理論を用いるメリット・オレムのセルフケア理論と組み合わせる理論・理論と実践をつなぐ・

実践する上で基盤となるセルフケア理論・子どもの捉え方・子どもができる力を引き出す・子どもの経験知を高める・家族をみる・親子をみる・依存的ケアエージェントとして求める能力・親としての役割・親との距離感・親を通して子どもをみる・CNSとしてのスタッフの関わり・意図的介入をする上での職場風土・スタッフに求める看護エージェンシー・教育する上での使いにくさ・言葉の使いづらさ・依存と不足の捉え方・子育て文化と子どもの甘え、であった。

・更に実践にセルフケア理論を活用するという視点で検討を加えた結果、オレムのセルフケア理論を用いるメリット・言葉の使いづらさ、を除く18のカテゴリーとなった。

・これらのカテゴリーを小児のセルフケア看護理論の必要要素として何が語られたか検討した結果、8つの要素に集約された。必要要素は【子どもの発達に応じたセルフケア】子どもを出来る主体として捉える【子どものエージェンシーとしての能力】子どもにおける依存と不足の意味【依存的ケアエージェンシーとしての能力】子育ての文化と甘え】【親子のありよう】【親役割】であった。

・これら8つの必要要素について、どのように分かりやすく説明できるかが今後の課題である。

引用文献

- 1) Orem, D. E: NURSING Concepts of Practice, MucGraw-Hill, 1991.
- 2) Orem, D. E: NURSING Concepts of Practice, MucGraw-Hill, 1975.
- 3) Orem, D. E: NURSING Concepts of Practice, MucGraw-Hill, 1980.
- 4) Orem, D. E: NURSING Concepts of Practice, MucGraw-Hill, 1985.
- 5) 三橋日記, 藤田佐和: 終末期がん患者の家族員のセルフケア行動と意味づけ, 高知女子大学看護学会誌, 37(1). 2012.
- 6) 定友由美: 統合失調症患者の退院支援についてオレムのセルフケア理論を用いて, 日本精神科看護学会誌, 51(3). 2008.
- 7) 中川雅子: 外来通院している虚血性心疾患患者のセルフケアの実態の探求. オレムのセルフケア理論を活用した面接調査をもとにして, 日本看護学会集録 24 回成人看護, 2. P40-43. 1993.
- 8) Foote, A. & Piazza; D. Orem's Theory Used as a Guide for the Nursing Care of an Eight-Year-Old Child with Leukemia. Journal of

- Pediatric Oncology Nursing.11
(1).P6-32.1994.
- 9) Ling, F.; Self-Care Behaviors of School-Age Children with Heart Disease, Pediatric Nursing,34(2).2008
- 10) Moorre. J.B.,Beckwitt .A. E.; Children with Cancer and their Parents: Self-care and Dependent-care Practices, Comprehensive Pediatric Nursing.27.1-17.2004.
- 11) Gaffney K.F., Moore J.B.; Testing Orem 's Theory of Self-Care Deficit; Dependent Care Agent Performance For Children, Nursing Science Quarterly, 9(4).P160-164. 1996.
- 12) Rhonda L., Conner-Warren.; Pain Intensity and Home Pain Management of Children with Sickle Cell Disease, Comprehensive Pediatric Nursing 19; 183-195, 1996.
- 13) 高橋千亜紀;思春期の患児の自己導尿、自己膀胱洗浄指導に関する援助の実際 オレムのセルフケア理論を用いて振り返る, 泌尿器ケア,16(11).P1169-1176.2011.
- 14)松尾ひとみ:小児看護におけるオレム看護論の活用と課題, 大阪府立看護大学紀要,6(1),2000.

5 . 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計1件)

発表者 河俣あゆみ、原朱美、三宅一代、片田範子 発表年月日 2014年7/20-21 (予定) 発表場所 日本小児看護学会第24回学術集会(タワーホール船堀:東京都江戸川区) テーマ:小児のセルフケア看護理論の構築に向けた必要要素の抽出

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者
片田範子(KATADA Noriko)
兵庫県立大学・看護学部・教授
研究者番号:80152677

(2)研究分担者 ()

研究者番号:

(3)連携研究者 ()

研究者番号: